

# 社 会 科

中 江 転  
井 南 亮 佑

## 1 社会科における「よりよい未来を志向する子」

我が国は現在、情報化社会と言われており、様々な分野に情報化が進展している。子どもは多様な情報手段から膨大な情報を得ることができる。一方で、日本の子どもの社会への関心の低さや、社会参画への意欲の乏しさは、諸外国と比べると顕著である。情報に溢れた環境で生活しながらも国家や社会への関心・意欲が低いということが現状だと言える。

新学習指導要領社会科の目標は、公民としての資質・能力の基礎を育成することである。資質・能力とは、知識や思考力を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的にとらえて現代的な諸課題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度である。資質・能力を社会的な見方・考え方を働かせながら身に付けることで、よりよい社会の形成に参画する人物を育てていくことができる。社会科教育を充実させることで、「国家や社会に対する関心・意欲が低い」という現状を打破することができるのではないかと考える。

本校の社会科では、選択・判断する力を身に付けることに重点をおいてきた。社会的事象を自分事として多角的視点から選択・判断し、自己の変容に気付くという流れを大切にしている。人は何かを選択・判断する際、理由や根拠を見いだそうとする。その際、一方向からの視点ではなく、事象間の共通点や相違点を探したり、一つの事象でも見方を変えたりすることで、見えなかったことが見えるようになり、自分の選択・判断をふり返ることができる。このような経験の積み重ねが、将来社会に出たときに課題を解決するための糸口になると考えている。

以上のことから、社会科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・ 社会的事象に対して問題意識をもち 自分たち事として解決しようとする子
- ・ 実社会で働く人や先人の姿を手がかりとし 友達とともに社会的事象について多角的な視点で選択・判断し 考察する子
- ・ 学んだことから自己の変容を自覚し 自分なりに社会とかかわっていかうとする子

## 2 社会科における未来へ生かす決める授業デザイン

まず、「どのようにして～しているのか、前までは～なはずなのに、なぜ～なのか」という子どもが考えたくなる「問い」や単元を通して考えていく課題、毎時間の学習課題として設定する。また、教材とする事象は子どもが自分の考えを根拠とともにもち、選択・判断（決める）をくり返して公民的な資質・能力を身に付けるために適したものを選ぶ。これらにより子どもは主体的に事象とかかわっていかうとする。

次に、「決める」場面を単元の中に複数回位置付ける。事象について考えさせていく中で、「決める」必要感を与える問いを教師が投げかけることで、子どもは根拠を探すようになる。その際には、地図や年表を用いて空間軸・時間軸を視点としてもたせる。また、学習したことを比較・分類、関連付けて考えさせる。このように社会的な見方・考え方を働かせることで深く事象と向き合っていけるようにする。また、他者との対話によって、自分の考えの深まりを自覚し、「決める」根拠が更新されるようにする。具体的には、課題について調べる際に、実際に社会の形成に従事する人から聞き取りを行い、よりよい社会を形成するための工夫や努力、専門的なことや重要なことを知る機会を設ける。そうすることで、子どもは再び「決める」ための新たな根拠を得ることができる。さらに、友達との話し合いを活動として取り入れることによって、子どもが友達と、共感したり、反論したりしながら学習を進めていく。同じ考えでも根拠が違っていたり、根拠が同じでも解釈が違っていたりする。意見を聞くことで新たな気付きを得て、自分の主張に説得力をもたせる新たな根拠となる資料を求めるきっかけとなる。このように「決める」ことで子どもに主体性が生まれ、学びが深いものへと変容する。

そして、単元中や授業中に自己の「決める」を繰り返す機会を複数回設定する。自己の変容に気づき、自己の成長を認識できたときに、子どもは社会により主体的にかかわろうとし、社会の一員としての自覚を実感していくはずである。単元の学習内容を繰り返るとともに、自分にどのような社会的資質・能力が身に付いたかも繰り返すようにする。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

今までの生活体験や既習内容との相違点が見いだせる社会的事象に出会わせる。子どもは「前までは～なはずなのに、なぜ～なのか」というような問いをもつ。各々の問いの交流を通して、集団の中で解決する価値のある問いへと高めていく際に、子どもは主体的な学びの中で追究していく課題を決める。子どもの認識とのズレから必要感をもって問題を解決したいと思う事象や子どもの心がゆさぶられる事象と出会わせることで追究課題を決めていく。

また、事実を調べたあとに、社会とのかかわりをもたせるために判断や意思決定を必要とする事象と出会わせたり、よりよい社会の形成に携わっている人に出会わせたりする。このような出会いを単元の中に位置付けることで、はじめは社会的事象を他人事として考えていた子どもが次第に自分事として考えるようになり、最終的には自分たち事として考えるようになっていく。「決める」をくり返していくことで、よりよい社会をめざすための自分の立場を明確にしていく。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

社会の形成に従事している人や友達の考えを聞くことで、自分では気付かなかったことに気付いたり、自分の考えと比較したりする。そうすることで、考えを広げ、深めていく。このような対話のある活動を意図的に取り入れる。例えば、ゲストティーチャーの話の聞いたり、地域の関係諸機関の人へ聞き取り調査をしたりする活動、ペアやグループでの話し合いや自分の考えを明確にした討論などの活動である。その際、中学年では見学や調査活動で見つけた事実、高学年では統計資料や年表、地図などを自分の予想したことや主張したいことを裏付ける根拠として示すことで、自分の考えがより明確になってくる。

また、討論する中で、社会的問題に対して自分たちにできることを考えさせたり、実社会で行われている政策についてどう考えるかを問うたりする。その際、既習単元の社会的事象と比較することも大切である。中学年では、「自分たちならどうするか、どう思うか」を考えていき、高学年では「～の立場で」「～の一員として」と考えたり、どちらを優先すべきかを考えたりしながら決める。複数の選択肢に対し是非を問うのではなく、良い点、悪い点も包括して考え、全員が納得できる最適解を求めていくようにする。

#### (3) 今までの学びを振り返り 未来に役立てる「決める」

単元の中で、単元を通して考えていく課題について、その時間の学習内容をもとにして選択・判断(決める)する機会を複数回設定する。選択・判断の変容はワークシートを用いて見えるようにする。また、ふりかえりとしてL(単元を通して考えていく課題や1時間の授業についてわかったこと)、F(自分の選択・判断の根拠となった友達の考え)、T(社会の見方・考え方を用いて今後追究したいこと)の視点で書き残していく。

単元の終末時には、単元を通して考えていく課題について自分の選択・判断を振り返り、自己の成長を感じさせる省察の機会を設ける。このとき、学習の履歴や単元の中で使用してきたワークシートを見返したり、単元の最初の自分と比較したりする。そのようにすることで、以前はなかった新しい発見や認識がもてるようになったことに気づき、自身の成長を実感できるのではないかと考える。また、これまでのふりかえりを見返すことで社会的な見方・考え方を働かせて考えたり、友達との意見の交流の中で多様な考えに気付いたりすることのよさを再確認することができる。

このような学習の流れをくり返していくことで、よりよい社会の実現をめざして社会の中で自分にできることは何か、自分はこれから社会とどのようにかかわっていくのかを主体的に考えることのできる子どもを育てていけるのではないかと考える。